発行・編集 朋芽の会事務局/houganokai@live.jp 2009/11/13

# 第5号

## ♣今後の例会案内

### ❖ 例会報告

【実践報告】 音読・劇化による読みの指導について 小澤 理

平成 21 年度前期研究テーマ

# 音読の「読むこと」

#### ※今後の例会案内

11月22日(日)、1月(研究大会)、2月

# \*例会報告 平成 21 年度 第2回例会

発行がたいへん遅くなってしまいました。

8月に開かれた第2回例会では、本会会長の小澤理の実践報告がありました。今年度から一年生の担当となり、様々な試行錯誤の中で生まれた実践です。

低学年における音読は言語の音声指導の側

面ももっていますが、一方でリトミックなど に例を見るように、音そのものを楽しむこと で理解の一助とする方法の可能性も開かれて いくでしょう。

前期のテーマ〈音読の「読むこと」〉のまとめとも言える実践です。



# 音読・劇化による読みの指導について

### 小澤 理

教材の音読や動作化の実践は多い。それは、子どもたちを作品の世界に引き込むためであったり、作品がもつ言葉の意味やリズムを感じとらせたりするためと、学習のねらいによって扱い方は変わってくるだろう。今回の実践は、「読むこと」に重点を置きながら音読・劇化を用いてきた。

#### 1. 作品について

「おおおきな かぶ」は、本校が使用している教育出版以外の教科書でも数多く採用されているいわば、定番教材である。「おおきな かぶ」はロシア民話であり教科書では、うちだりさこ訳のものと西郷竹彦訳のものに分かれている。訳し方については、ほぼ同じであるが表現が若干異なる部分もある。そのため、今回は教育出版に載っているうちだりさこ訳のものを使用した実践となる。

「おおきな かぶ」には、リズム感のある言葉や、繰り返し出てくる言葉があるため、声に出すことでそれらの楽しさが味わえる作品である。また、みんなで協力して何かを達成することのよさを文章から感じ取ることができる作品だと考える。

翻訳者である西郷竹彦氏は、「おおきな かぶ」の主題を以下のように話している。

自分たちの力だけで出来ないことは仲間の力を借りる。また、仲間になっていっしょに大きなかぶを抜く。この反復が、仲間が連帯するという主題を強調しています。しかも、この反復は、大きな強いものから、小さな弱いものへという変化・発展する反復になっていて、小さな弱いもの(ねずみ)の大きな役割、意味という思想を浮き彫りにしています。

ところで、語り手は、これらの人物の心情は一言も語りません。たとえば、ねこがねずみを呼びに行くとき、ねこは何を考えたか、また、ねずみはどう思ったか、ということは問題にしません。小さなねずみでも仲間を呼びに行く、そして、たとえ、どのように思っても、仲間に呼ばれたら、加勢するという行動そのものに大事な意味があるのです。

(「小学校 国語教育相談室」No.19 光村図書出版より引用)

#### 2. 音読・劇化について

音読や劇化の実践は、「おおきな かぶ」だけではなく、様々な教材において行われている。そして、音読についての考え方は、様々な移り変わりがある。例えば、昭和53年改訂の指導要領では、音読は理解、朗読は表現のためといった考え方がなされていた。

多少話がそれるかもしれないが、学校で劇が始まったのは明治33年ごろからである。児童文芸誌『赤い鳥』で児童劇脚本を掲載されたことにより児童劇・学校劇は各地で盛んに実践されていった。これは、今日の学芸会とのつながりが深いわけだが、国語や道徳などで行われるロールプレイとも切り離せないことではないだろうか。声を出し、動作化するということは、長い時を重ね現在の学校現場に根付いてきたのである。

#### 3. 指導について

- ①範読・音読練習。
- ②音読、おじいさんの「あまい あまい かぶになれ」の読み方を考える。
- ③音読、「あまい かぶ」と「あまそうな かぶ」のちがいは何?

- ④ぬけないかぶの表現の仕方を確認する。
- ⑤「うんとこしょ、どっこいしょ」の音読の仕方を考える。
- ⑥音読・劇

指導の流れとしては、以上のように行ってきた。子ども達は、最後に劇をすることを目標に「 」の言葉の言い方や声の大きさの違いを考えながら音読練習を行ってきた。

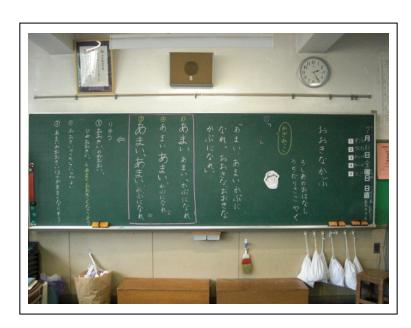
#### ②について

「あまいあまいかぶになれ」を読むときにどのような大きさで読んだらいいのかを考えた。

「**あまい**あまいかぶになれ」・・・ 1人 「あまい**あまい**かぶになれ」・・・ 2人 「**あまいあまい**かぶになれ」・・・30人

クラスのほとんどの児童が、あまいあまい を大きく読んだほうが、いいと答えた。 理由としては、

「大きく読んだほうがあまくなりそう」 「あまくおおきなかぶができそう」 というものだった。



ここでは、直接おじいさんの気持ちを考えはしなかったが、あまいかぶになってほしいという気持ちを読み 取り読み方を工夫することができた。

#### ③について

「あまい かぶ」と「あまそうな かぶ」の 違いを考えた。

みんなで、話し合っていくなかで、食べてみ て分かるのが「あまい かぶ」

見た目で分かるのが「あまそうな かぶ」 という結論になった。音読には関係ないかも 知れないが、「~そうな」の表現を指導する ためにこの部分をとりあげた。



#### ④について

全文を音読し、かぶは抜けたかどうか を確認していった。 児童は「ところが」や「それでも」等を 特に意識していないようだったので、私の 方から言葉の違いについて指導した。

全文を読み、気づいたことを発表させた ところ

「ねずみで抜けた」
「大きい順番になっている」
「6人いるから抜けた」
「人が3人、動物が3匹、植物が1つ」
「穴を掘らずに引っ張っている(なぜ?)」



などの意見がでてきた。多少、こちらで補足や説明はしたものの、児童は自分の力で物語の流れや状況を読み 取ることができたのではないか。

#### ⑤について

「うんとこしょ、どっこいしょ」の読み方 を挿絵を見ながら考えていった。

おじいさんが一人で抜こうとしている場面 は、ちょっと小さく、人が増えていくにつれ て大きく読んだ方がよいという結論になった。

動物が登場する場面では、「うんとこしょ、 どっこいしょ」ではなく犬だったら「ワンと こしょ、ワンワンワン」、ねこだったら

「ニャンとこしょ、ニャンニャンニャン」の 方がよいのではないかとユニークな考え方も でてきた。



最後に、次回の劇をやるときの配役を決めて終わりにした。

### ⑥について

劇のやり方としては、台詞を 新たに追加することはせずに、 動作の工夫、読み方の工夫のみで 表現することとした。

その際には、今後の群読への発 展も考え、8グループに分かれて パート別に音読をさせた。

何度か練習した後、役のきまった 児童を前に出し、音読に合わせて動作 化を行った。

劇をした後は、それぞれの感想をまとめた。 ・抜けてうれしかった。



- ・みんなにあげたい。
- みんなで食べられる。

など、登場人物の気持ちになって感想を 言うことができた。



#### 4. まとめ

1年生の児童は理解の仕方、作業の早さなどの差が大きい。ひらがなを十分に習得している子もいれば、書けない子もいる。そんな中で、どのように物語に引き込ませて話を理解させるかが課題であった。

音読の仕方(特に人物の台詞)を考えることで、気持ちや作者の意図を読み取るという手立ては、有効であるように思えた。

また、劇中に体の動かし方が分からなかった児童が、周りの音読に合わせて次第にうまく動けるようになっていた。かぶを抜こうとする演技では、前の人の体ではなく、かぶの葉っぱをひっぱっている様子もあり理解度を確認することもできた。

最後になるが、何より子どもが進んで楽しみながら学習できたことに意味があったと思う。こちら側の読みを伝えるのも必要ではあるが、豊かな発想で楽しいと思えるような展開を作ってやることの重要さを感じた単元であった。

「おざわ・まこと / 八王子市立元八王子東小学校教諭 ]

#### ※お知らせ

○次回例会のご案内

平成21年度第5回例会

第5回理事会

日時:11月22日(日) 午前10時00分~

場所:東京学芸大学附属図書館

ご意見・ご感想をお寄せください。 houganokai@live.jp 朋芽の会事務局